

1 「人々のインフラ」のために：インフラの再定義

人に着目したインフラとその再定義

貧困削減やミレニアム開発目標（MDGs）、経済成長といった開発目標を達成するため、インフラが重要な役割を担うことが、近年再認識されてきている。インフラの役割についても見直しが行われつつあり、これまでストックとしての量の確保や個々のインフラによる整備効果（渋滞緩和、水供給の拡大等）が重視されてきたが、近年は、過去の反省を踏まえた、環境社会面での配慮、効率性や受益者へのインフラサービスの確実な到達など、アウトカムとしての指標が設定されてきている。

しかしながら、ここでは、更に人々に着目して、望ましい状態とは何かを考え、この結果インフラが、貧困削減、MDGs及び経済成長等、開発目標を達成し、究極的には、人々がその潜在能力を発揮し、人々の可能性を実現させるために共通に必要な基盤としての役割を持つものとして再定義した。

従来のインフラの効果の捉え方

インフラによる直接的な影響、効果は考慮されてきたが、インフラはサービスを提供するための要素であると捉えること、また、さらにサービスの提供が活動機会を多様化させること、最終的に人々の潜在能力を発現させるものという考え方はあまりなかった。

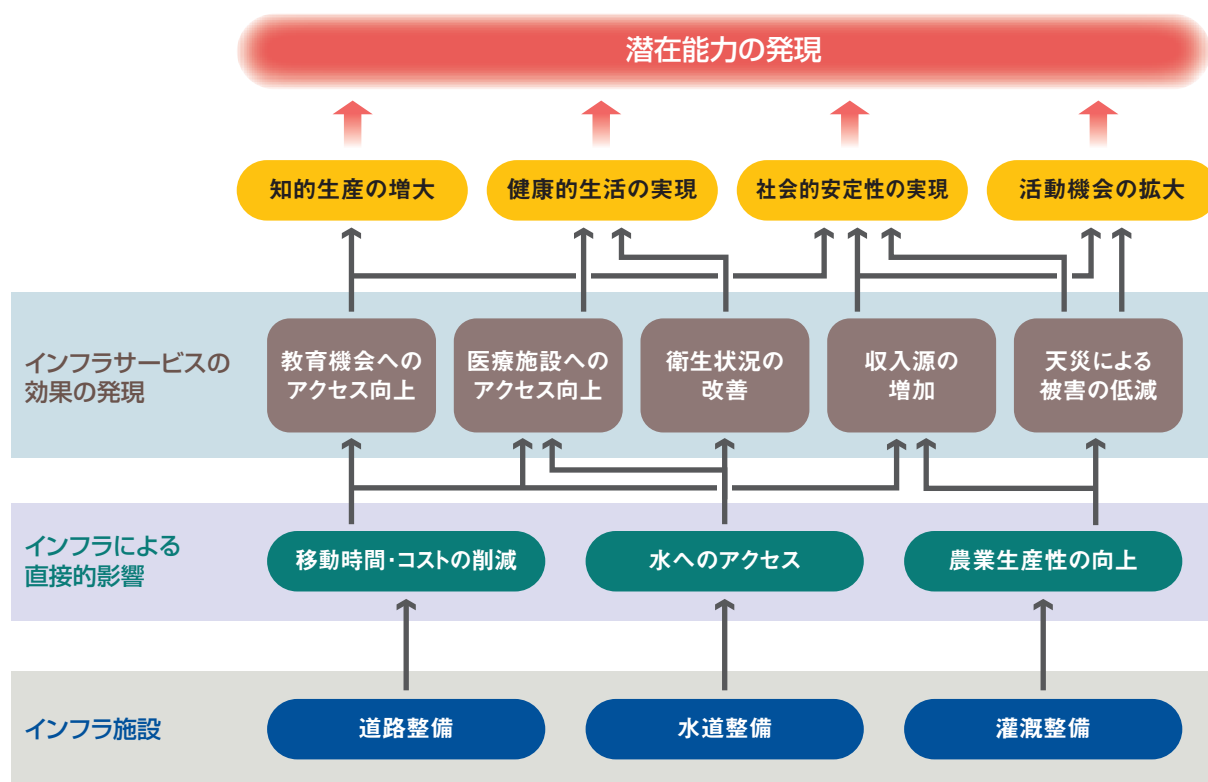
人々の潜在能力を発揮させるインフラへ

このような認識のもと、近年、各援助機関ではインフラと貧困削減の関係を精査しようとする動きが見られ、インフラをサービスと捉える試みは増えつつある。またアウトカムまで追ったプロジェクトも見られる。例えば、アジア開発銀行による「農村道路の貧困削減への影響：ケーススタディ」（2002）では、道路の整備に伴ってまず運輸業者や商人が活動を拡大し、続いてそれまで農業を営んでいた人が運輸業や商業活動に参入した。

他方で、インフラによるマクロな効果についての検討もなされており、世界銀行の「ミレニアム開発目標の達成：インフラが果たす役割」（2003）に関する研究では、インフラの整備により幼児死亡率が大きく低下すると指摘されている。

しかしながら、貧困削減などを経て、長期的にいかなる潜在能力を発揮させ、最終的に人々がいかなる状態を望むのかを見極め、これを達成するためにいかなるインフラが必要であるか、といった観点からの取り組みは未だ十分ではない。

インフラサービスによる潜在能力の発現



インフラがその役割を果たすメカニズム

インフラの最終的な目標、役割は、前ページの図の階層構造における最上位の概念である「人々が潜在能力を発揮し、人々の可能性を実現するために共通に必要な基盤」といえる。

インフラがこの目標達成に貢献するメカニズムは大きく2つに分けることができる。ひとつは、直接的に基本的なインフラサービスを提供し、それにより人々の活動機会が多様化・広範化されることで、貧困削減やMDGsへの達成に至る経路を挙げることができる。もう一つは、インフラサービスがその国・地域における経済成長を支援し、それを通じて所得水準や生活の質を向上させ、貧困削減が達成されるという経路である。前者は、個々の事業による貧困削減へのインパクトは明瞭であるが、持続性が確保されず長期的に貧困削減を達成することが困難な場合がある。このインフラに対する投資を持続的に行うためには経済成長が必要で、それを支えるようなインフラが重要となる。ただし、インフラが成長に貢献する過程では、所得格差や地域格差の拡大、環境悪化などの負の影響をもたらす恐れがある。このような場合には、貧困層への裨益を確保する、あるいは環境悪化を緩和させるような補完的な施策が必要となる。

JICA の取り組み

人々の潜在能力とは何か、潜在能力を発揮し可能性を実現するとは、どのようなことかについて事例の蓄積とともに、共通認識の醸成を行い、その活用を図っていく。

注) Pro-Poor Growthでは、そのチャネルは直接チャネル、市場チャネル、政策チャネルといった考え方の区分もある。



浸水した道路を渡る家族(アルゼンチン)

インフラの再定義「人々の潜在能力を発揮させ、可能性を実現させるために共通に必要な基盤」

